



ヒマラヤ・ランタン谷でのひととき

名古屋大学大気水圏科学研究所 坂井亜規子

ヘリコプターの薄汚れた窓から目を凝らしてリルン氷河を探す。“多分あれだ！”。プロペラがまわる轟音のなかカメラのシャッターを押した。こんな汚れた窓からでは、きれいに写らないだろうなどと思いながら、昨年1996年の5月に氷河調査プロジェクトに参加するためネパール・ヒマラヤのランタン谷キャンジン村（標高約3900 m）に入ったときのことである。そして半年間、延々と岩石でごろごろ、でこぼこしているリルン氷河上を歩くことになった。

ヒマラヤの氷河はリルン氷河のような“岩碎に覆われた氷河（D型氷河）”と“岩碎に覆われないきれいな氷河（C型氷河）”の2つに分類され、特にD型氷河は他の地域であまり見られずヒマラヤにおける氷河の特徴の一つとなっている。ところがこの氷河は消耗域が厚い岩碎に覆われているため、特に消耗の過程が複雑である。そこで今回の私の調査は“D型氷河の融解量をモンスーン開始から終了まで測る”ことが目的であった。

岩碎に覆われた氷河は一見すると岩だらけでとても氷河には見えない。その上を歩いて氷が出ているのを見て“これって氷河なんだ！”とようやく「氷の河」であることを認識する・・・といった、まことに氷河らしくない氷河なのである。ある先生と一緒にリルン氷河上をふうふう言いながら歩いているとき「こんなに複雑な氷河のことなんてわかるの？」と真顔で言われたことが今でも忘れられない。氷河の岩石の下では氷が融けているので、大きな石もガタガタ。“浮き石は踏まないように”などと言ってられない。すべての石が動くのだ、と言いつつ聞かせながらの油断できない調

査となった。浮き石でバランスを崩し転んでしまうことは、そう大した事件ではない。“こんなに歩きにくい氷河をなぜ研究対象にしたんだろう、氷河にはきれいな雪や氷が沢山あるはずなのに・・・”などとぼやきながらよく歩いたものだ。疲れてくるとキャンジン村から見えるリルン氷河のエンドモレーンが、なんだかいつもより高く見えてくる。

こんな時、いい息抜きになったのが“与作”と“タロ”という2匹のチベット犬である。与作とタロはそれぞれ雄と雌で（雌と知らずタロと名付けてしまった）そのほかにも沢山チベット犬はいたのだが、観測によくついて来たのはこの2匹だった。別に餌をやったからついて来たわけでもなく、“何か面白いことないかな”という感じでついてきたようだ。2匹の性格は全く違ってタロの方はおとなしく従順で、与作の方は観測についてきても途中で先に行ってしまうが、いつの間にやら後ろから全速力で追い抜かして人を驚かせたりする、突飛な行動をする犬であった。岩石だらけの氷河上は犬たちにとっても少々歩きにくいらしく、時々足を滑らせては私を笑わせてくれた。タロはよく気象ステーションのデータ回収に行く私たちの仕事が終わるまで、気象測器の下でごろんと横になって寝ていた。最初は追い払っていたが、データ回収の時だからとかまわなくなった。氷河上は日射が当たると周りの岩石からの照り返しが強く、暑い所が苦手なチベット犬にはかなりつらそうだった。あまりにも暑いと傘をさしてやったり（写真1）、のどが渇くと露出した氷をなめてしのいでいた（写真2）。氷の融解量を測っ



写真1 傘で暑さをしのぐと作.



写真3 岩砕に覆われた氷河上に咲く花.



写真2 露出した氷をなめると作.



写真4 岩砕に覆われた氷河上に咲く花.

ていた私としては、犬がなめて融解量が増えてしまうのではないかとひやひやものだった。

犬のせいかどうかは知らないが、モンスーンの初め頃、ノミかシラミに体中を刺されたのにはまいった。タロもよく道に座り込んで体をかいており、二人(?)そろって観測への道中掻きまくりながら歩いたものだ。まあこんなことでは死にはしないからと思っても、他の誰も刺されておらず私だけというのは不公平・・・後から考えてみると、どうも3ヶ月間シャワーも浴びずに垢だらけになっていたからのようだ。最初はロッジでシャワーが浴びれるのに、お金が取られるのがいやで(1回100円もしないのに!)しかし痒いのに我慢できなくなってリルの流出口でひそかに水浴びをした。しかしこの水はもとは氷河からの融解水で冷たく満足に浴びれない。意を決してロッジでシャワーを浴びたら虫に刺されることもなくなり、その後このシャワーは数週間に1回の、息抜きを乗り越して“至上の幸福”となった。

もう一つの息抜きはモンスーン中に咲き乱れた

花である。もともと私は“この花きれい!!”などというガラではないのだが、7月の終わりから8月にかけて咲く花は“きれい”だった。観測が終わった帰り道、早く帰りたいようなシェルパを返し、一面のお花畑である氷河脇のアブレーションバレーをゆっくり、カメラを片手に一人で歩いたものである。しかも花が咲くのはアブレーションバレーだけでなく、岩がごろごろしているだけと思われた氷河の上にもところどころ咲いていた。雪や氷でいっぱい南極やグリーンランド、そしていわゆるクリーンタイプと呼ばれる白い氷の河には咲くことのできない花がここでは咲くことができるのだと思うと嬉しくなってしまった。氷河上に咲く花は1種類のみではなく3、4種類の花が季節が移るにつれてかわるがわる咲いていった。ちょうど長期滞在の沈滞期に入っていて、雨も多く毎日がけだるく過ぎていった頃である。シェルパのコックも気を使ってくれ、テーブルに花を生けて落ち込んだ気分を盛り上げようとしてくれた。稀に午前中晴れ間があるとヘリコプターが

飛んでくる。ヘリポートに設置した気象測器の風速計が離着陸の時に無茶苦茶な突風を記録する以外は別に関係ないのだが、ヘリが飛んでくると村人と同様“誰が来るのだろうか？”と興奮したものだ。

そして氷河上の花がほとんど散ってしまう頃ボストモンズーンの観測隊がキャンジンにたどり着き、モンズーン中のけだるさが嘘のようにワイワ

イガヤガヤとあつという間に観測期間が過ぎていった。キャンジンからカトマンズへ帰るとき、与作はすねていた様だったがまた元気に他の外国人に餌をねだっていることだろう。タロはおなかに赤ちゃんがいたようだが元気な赤ん坊を産んだだろうか？もうその赤ん坊も今では成犬になっている頃だろう。

科学技術者 100 万人集会 第 7 回「基礎研究の振興と科学技術教育」シンポジウム —経済構造改革と国際的エンジニア育成—

日 時：平成 9 年 12 月 8 日（月） 10：00～17：30

会 場：東京都港区六本木 7-22-34 日本学術会議講堂（TEL：03-3403-6291）

主 催：社団法人日本工学会/社団法人日本工学教育協会

参加費：2,000 円（懇親会費を除く）

—プログラム—

10：00～11：30 [第 1 部] 国際的エンジニア教育への改革

11：30～12：10 基調講演「日本経済の再建と科学技術政策」経済企画庁長官 尾身幸次

13：00～14：40 [第 2 部] 産業革新政策とエンジニア育成

14：50～16：30 [第 3 部] エンジニア教育と資格問題への学協会の対応

16：30～17：20 質疑応答

17：30～19：30 懇親会 “はーといん乃木坂”（健保会館） 会費 8,000 円（当日持参）

参加申込：往復ハガキに氏名・勤務先・同住所・同電話番号・所属学協会名・会員番号を明記した上、返信ハガキ表に通信先住所・氏名を必ずご記入下さい。（FAX でのお申し込みは受付ません）

懇親会：参加希望の方は、その旨ハガキに明記して下さい。

申込期日：平成 9 年 12 月 1 日（月）

申込先：〒107 東京都港区赤坂 9-6-41

社団法人日本工学会「12 月シンポジウム」係宛

電話：03-3475-4621